汲古一心

『柿』

大槻磐溪詩（五言絶句）―昭和6年―

花も八重までがひと通りすんでしまうと、急に日かげの長くなったのに驚かされる。私はそろそろ柔らかな柿の新芽が目をさまして、油を塗ったような光沢のある葉が、このごろの日光に照り映えているのを見ると、以前住んでいた家の庭を思い出さずにはいられない。

元は郡長の役宅であったというその家は、北裏がささやかながら竹と柿とのひと藪になっていて、ちょっと近所との隔たりになっていた。私はその閑静さが気に入ってその方に向いた部屋を書斎にして暮らしていた。

毎年のことではあるが、六月も梅雨の雨が、そろそろ暑さを含んでくるころになると、差し庇の板屋根や蒼々と苔の着いた庭石の上に、とてもはずみのあるゴトーンとかポタリとかいう音が思いもかけない時分に、庭の幽寂を破って書斎の主人公を驚かしたもんだった。

雨あがりの滴が、まだ竹の葉末からすっかり落ちきらないのを、とんでもない時分にひとわたりかすかな風が来て、苔の上に滴の浸みる音をさせて行くのさえ、はっきり聴きとれるような静かな夜を突き裂くほどの響きをたてて物の墜ちた気配がして、それっきりまたもとの静けさにもどると、前よりも一層室の裡の閑静さが身に沁みるような気がして、このごろ時折断続することの音の主が、多分それだと判っていても何となくたしかめてみたい気持ちがして、折角錠までかけてある納戸の北戸を開けて、土の湿りがひやりとする庭の上を見透かすと、たわいもない顔をしてまっ青な渋柿が十も十五もコロコロと電灯の光りに照らし出されている姿を見ると、何となく子供のように、にこつきたいおかしさがこみあげてきて、しばらく縁先へ蹲踞んで二度も三度も丁寧に数えてみたりさえした。

さあそれが秋口の肌ざわりの好い風と一緒に、少々甘味を持ちかけると、以前は大森の方にいた詩人Sまでが、めったに来たこともない重い尻を、とにかくこの田舎町まで運んで来ようというくらい、有縁の文人諸兄の人気を博したものだ。

土曜の晩から、柿喰い専門に泊まりがけで来たSが、夜明けを待てないで、提灯の光りに夜露濡れが何となく秋の冷たさを感じさせる熟柿のしたり顔を下から覗いて、ひと通り見当をつけてから、たわわな枝をいよいよ撓ませて、一体どうするのかと思うほど、採っては下へ投げているうちに、夫子自身何のことはない、熟柿のように小枝の端から転げ墜ちてしまった。

地靄が、うっすりと霜を結びそうになるころの残り少ない柿の紅葉ほど、田舎おびた秋の心を見せるものはたんとはないと思う。実際私に、この二、三本の柿を愛させるようになったのは、信州の別所温泉に通う山路で、深い夕霧の中でごく少しの紅葉を残した頭だけを、しょんぼりと浮していた侘しい柿の野趣を読んでからのことだ。

しかしそうはいうけれど、本当の枯木の含蓄を私に教えてくれたのは実にこの庭の何本かの柿なのであった。

枯淡――

全く、私はこの言葉の持つ深い深い侘の真髄を、あの粗野な柿の枯枝からしみじみ教えられたものであった。

芭蕉の亜流であろう筈の俳人川村黄雨翁に、「庭木の為には怪しからんやつですよ」と叱られた蓑虫は、独りぼっちの仙人のようでもあり、世の中をあきらめた寂しがりやの詩人のようでもあり、じっと見ていると何だか話しかけて、孤独の生涯に慰めの言葉のひとつもかけてやりたいほどの親しみをさえ感じさせる。この蓑虫がよくこの柿の枯枝に吊り下っていた。

陽は暖かくても木陰づたいの風は、まだハッとするような冷たさを持っている。いずこともなく彷徨こんで来るこの小やかな風にさえ、休みなしに蓑虫は揺れていた。そしてまた、私の唱えない詩心をも揺り動かしていた。――あの古庭の一本の柿の木の前で――。

〈『詩・散文』、昭和六年〉

『筆間雑記』中村素堂随筆集(昭和六十三年刊)より転載。